

ルドルフ・フォン・ラバン 「芸術作品としてのコロス」¹⁾

Rudolf von Laban, « Das chorische Kunstwerk » (1928)

連携。共同作業、共同制作。これらは我々の時代の象徴である。それは圧倒的な分業の進んだ大都市の巨大企業だけのことではない。祝祭、遊戯、祝賀においても、今日の個人は、各々が受ける教育の平等において、新種の文化という偉大な作品を希求する世の一般の代表者である。

人々は劇場でのコロスを、音を奏でる可動式書き割りのようなものとして、あるいはソリストが自らの見事な名人芸を引き立たせたり、しばしば商才を発揮するだけだったりする額縁として眺めるのに慣れている。今日そんなところに喜びを見いだす者はもはやいない。出演者の規模と編成において少人数しか見込んでいない芸術作品では、ソロないし少人数で演じられるのも好まれるかも知れない。けれど我々は新しい劇場作品の形式を打ちたてるのであり、それは平等の下にある同じ人間として文化的調和の中で生きる人類の営為を象徴するものなのだ。

旧来の作品は、英雄が一呼吸入れるために誰とも知れず何やら唱える人民を必要とした。これは歴史的に見れば大変興味深いことかも知れないが、我々の心情や憧憬に触れてくるものではない。我々の社会や理念にかかわる意志を映し出す鏡となるのは、芸術作品としてのコロスのみである。

これまで知られているコロスには、アマチュアによるもの、歌唱や身体運動によるものがあり、独立した芸術ジャンルのような形態を育んできた。それらはとりわけ歌唱において、教会や儀式の技術訓練を部分的に取り入れてきた。アマチュアの舞踊コロスは、いにしへの芸術共同体が再び目覚めたものだし、我々のところでは、芸術とはまた外観を異にする体操フェスティバルでよく行われていた。

複数の劇場がアマチュアのコロスに触手を伸ばしている。彼らは財政難の時代にあって、プロの舞踊コロスをそのようなアマチュアで置き換えようというのだ。安上がりな点に理由があるのは明白だ！それが社会的かつ芸術的に不当な行為であることは、徐々に露見してきて

いる。しかし何故、プロの舞踊コロスを設立しないのか。主な問題は、運動芸術すなわち舞踊が、劇場においてまだ言語芸術や音楽芸術と同じように大切にされていない点にある。一般公衆が舞踊芸術に対する喜びを持ち得ないのも、一人や二人のソリストが巨大な舞台上を飛び回るだけなら無理もない。離れた座席から彼らは、窓辺の蚊ほどにしか見えないのだから。一方近くに寄れば、誰の関心もひかない個人的な自己陶醉を目の当たりにするかも知れない。観客に自分の共同体の心性を反映するようなコロス作品を見せれば、観客はフルオーケストラが心をついに奏でた音楽に対するような喜びを見いだすであろう。

とはいえ良いオーケストラは真の実力を持つ芸術家たちから構成される。彼らは特別な何かを習得して業績を残すことができ、それにより自らの仕事にふさわしい報酬を要求することができるようになる。現代においては、そのような共同作業に心を躍らせ参加するであろう立派な舞踊芸術家が数百という。

にもかかわらず！そのような舞踊コロスを必要とする作品があるだろうか。もちろんあるのだ！そうした作品は複数存在し、何よりそのような作品を創作する能力を持つ人間は数多い。多数のバレエマスター、演出家、自由舞踊の指導者、相当数の詩人と音楽家がすでに数十年来、いやフランス革命以降、さらにより古い時代から、同様の考えに沿って仕事をしてきた。我々の時代には、考えを実行し活性化させる仕事が残されている。

初めに試みたのはアマチュアのコロスだったが、彼らの力の及ぶところではなかった。アマチュアのコロスにはそれなりの使命がある。それは仲間とともに踊る喜びのほうにより役立ち、観客は副次的な役割を担う。これは歌唱コロスにおいても同じであろう。ある歌唱クラブが音楽的にも目を見張るような仕事を頻繁になしうようになっても、それは観客の入れ代わりの激しい大衆向けの劇場作品ではない。プロの歌唱コロスは正しい課題の前に立てば、身体運動、衣裳、色彩、照明により力を増し、極めて多くのことをなしとげる。とりわけ劇場映

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Singchor und Tanz. Fachblatt für Theatersingchor und Kunstanstanz. Berlin: Deutscher Chorsänger-Verband und Tänzerbund 1928. S. 160-161.

えといった意義において。それでも大劇場の将来は歌唱と舞踊コロスの共演にある。広い世間に対する影響力を備える大劇場は、今日、それ以外のいかなる目的、使命も持ち得ない。

ここはそうした表現を求める作品を数え上げる場ではない。我々の舞踊にかける意志は今日、そのような作品を一規範に沿って作舞されている限りではあるが―楽譜や文字と並行して書き留められるほどに進んでいる。舞踊のパートを採譜する可能性のなかった間は、そのような作品を生み出すことはもっと難しかったが、今やこの不足は取り除かれたのだ。必要なのは、50人ほどの歌

手と舞踊家から適正に組織されたカンパニーを生み出すことだけとなる。器楽オーケストラは、必要があればいつでも簡単に編成することができるが、器楽音楽なしでも多くのことがなされ得るだろう。アカベラの新たな効果、楽音以外の音による伴奏、あるいは全くの沈黙とその他の人目をひく形式が姿を現し、それぞれの道をうがう。そのような芸術家集団の拡張した意志は、すべての道を均し、我々の劇場の解放といった卓越した事柄を成し遂げることができるのだ！

(訳：古後奈緒子)